

観 測 案 内 (9月)

木 邊 生

9月 月の始めには大抵未だ暑いが、それも半ばを過ぎると、メツキリと涼しく、夜も更けて鳴く蟲の音に、ひとしほ秋の涼氣を覺へる。

晝間カイツとする残暑の落日は早く、何處よりとも語らぬ涼風を傳へ、
ジャンク戒克船と、遙かな“紅燈”を點景に、流るゝとも、流れざるが如き長江の秋は又別趣があるそうだ。然し、今年はそんな事を云つて居られないかも知れない。處を越へ時を越へ、人の歴史に關せぬ流れも、見様によつては“人間性の矛盾”を嗤つて居るだろう。誰しも科學の發達は歓迎する。だが、與ふべくんば、人々に幸せのみを齎らせ度いものである。廻行を續ける事數十時、漸く江岸靜かに眠る小丘を認め得やう。彼等は自ら史跡すら持つて數千年を語り得るかも知れない。然しこんな愚問はすまい。“汝、幾度か英雄の興亡を知れるや”と。

天候、**シーイング** 9月と6月は内地では平均最も雨量の多い月である。大陸には高壓部の根が出來かけるので颱風は往々内地を襲ふ。だが去年の様に天氣の良い時もある。シーイングは涼しくなると共に、稍悪くなる様である。然し同時に夏特有の白んだ空も消えて、仲秋の名月と呼稱される様に、清澄な空色になるのが嬉しい。無風の冷へ冷へする夜には、露が多くなる。とにかく氣候の不安定なる月である。

太陽 觀測は氣溫が降ると樂になるが、天候の都合上やはり觀測日數の少ない事が多い。7月8月と異常な活動を見せて居る太陽面は、依然相當な活動を續けるだらう。

遊星面 金星は曉天に、火星は西に低く且つ小さく、甚だ見甲斐がない。木星のみ、中天に巨光を放つて居る。8月號の伊達氏の記事に依つて、小一中口徑機の所有者に期待する。

土星は細い輪を見せて、東天に昇つて來るが、10 cm 級では充分輪が見えないだらう。

恒星界 夏の花役者も、少し西に傾き、ベガスやアンドロメダ、カシオ

ペアと傳説に美しい一團 Royal family の登場だ。戻つて來たかと云ひたいペルセウスの二重星團や、アンドロメダの星霧は何時見ても美しい。前號の續きに同じカタログに依つて見ると、且つて一度なりとも max. に於て肉眼に明かに認め得た變光星は89個であつた。但し此の中20個は新星である。今其等を表にすると下記の様になる。

光 度	Max.	Min.
$\overset{m}{>5.5}$	89(20)	34
$\overset{m}{5.6}-\overset{m}{6.5}$	116(10)	26
$\overset{m}{6.6}-\overset{m}{9.9}$	1519	467
合 計	1724(30)	527

註 () 内は含まれた
新星の數

$\overset{m}{9.9}$ と云へば 3cm で認め得るし、5cm あれば観測の出来る大きさである。此の様な星が完全に500もあるのだから、観測者の不足が頷ける。

9月中頃に“ミラ”の極大が豫想されて居る。今年の極大光度は如何程か？もう來年には Max. の観測が困難になるから、(以後數ヶ年 Max. を捉へ得なくなる) 見るならば今年だ。北天には δ Cep が目にとまる。今更練習的な意味以外、此の星の眼視観測の意味はないが、その變光原因に關しては、Nova と共に興味深い點では双壁である。この兩種の解決が出來れば、或は殆んど全部の解決を提供するとさへ考へられて居る。詳しく云へば限り無いが、2, 3の著しい點を云へば

- 1) スペクトルが周期と共に著るしく變化する。(特に電離線が)
- 2) スペクトル型と周期が正しく平行して居り、(短かいものから長いものへ A より G 移る) 考へ様によつては“ミラ”型に續いて居る様である。
- 3) 絶對光度が大きく、全部超巨星の特徴が明瞭である。しかも前同様の周期との關係が實驗式として成立し、數十日の周期の星は -5 等級の絶對光度(リゲルやカノプスにも劣らぬ)を持つて居る等である。

昨年	6h	21h	
雲量	4.9	4.5	太陽黒點相對數平均 1 日 93.5
氣溫	+19.1°C	+21.4°C	観測日數 25日

9月18日 Nova Aql 1936 I 發見 6等級 (變則の新星)。